

地歴公民 (世界史)

<全体分析>

試験時間 90 分

解答形式

大問単位では、記述式・選択式と短文論述を併用する問題が 3 題、長文論述が 1 題で例年と同じ。問題 I ～ III では客観式 (記号解答・時代配列) は昨年と同じであったが、語句で解答する記述式が大幅に増加し、短文論述も昨年よりやや増加した。問題 IV の長文論述は例年通り 350 字で、昨年に引き続き指定語句を用いる問題であったが、今年は指定語句を「すべてを使う必要はない」形式となった。

分量・難易 (前年比較)

分量 (減少・やや減少・変化なし・やや増加・**増加**)

難易 (易化・やや易化・**変化なし**・やや難化・難化)

出題の特徴

出題分野では、地域別では欧米地域とアジア地域がともに出題され、ややアジアの割合が多かった。時代別では、古代から現代まで出題されているが、2 年連続で戦後史が出題された。

設問数では量的に今年は増加しているが、難易度は標準レベルの設問が多いので、90 分の制限時間で十分解答できる。

問題 IV の長文論述も、地域史を満遍なく学習してあれば対応できる。

問題 I ・ II ・ III はすべて文献資料・史料を用いた出題であった。

入試改革を踏まえた出題

問題 I の問 4 b) の空欄補充問題は大学側から出題ミスの発表があったが、本来の意図としては共通テストと似せた単なる用語補充ではなく、具体的な内容を問う形式が出題された。

その他トピックス (入試改革の方向性を踏まえた目新しい出題など)

問題 I と問題 II は、引用した文献資料を読み取らせて答案に反映させるもので、入試改革の方向性を踏まえたものであった。

<大問分析>

番号	出題形式	出題分野・テーマ	コメント (設問内容・答案作成上のポイントなど)	難易度
I	記述式・短文論述	中国史上の反乱	世界史リブレット(山川出版社)から引用したリード文を使って中国の政治史を扱った問題。用語ではなく空欄に入る文章を書かせる問 4 b) は、引用文どおりの文章で答えるのは難しい。	やや難
II	記述式・選択・短文論述	経済統合の歴史	文献資料から引用した文章に下線部を設ける形式。設問の大半は語句を答えるもので比較的平易、ブロック経済の内容を書かせる短文論述も標準的レベルである。政治史ばかりでなく経済史でも丁寧な学習が望まれる。	標準

地歴公民(世界史)

名古屋大学 文学部、情報学部(人間・社会情報学科)(前期) 2/2

番号	出題形式	出題分野・テーマ	コメント(設問内容・答案作成上のポイントなど)	難易度
Ⅲ	記述式・選択・短文論述	19世紀のヨーロッパ	5つの史料とその題名などを結びつける記号解答と、それらの時代配列、各史料に関する記述式・短文論述で構成されており、設問の出題レベルは、標準的である。	標準
Ⅳ	長文論述(350字)	東南アジアにおける東西交流と海上交易	紀元前後から5世紀頃の東南アジア史を、東西交流と海上交易という観点で扱った問題。6つの指定語句は基本的なものばかりなので、教科書を丁寧に学習していれば対応できる。また、指定語句は昨年「すべてを使う」ものであったが、今年は「すべてを使う必要はない」とされた。 このテーマと内容は、今年の第1回名大オープンで出題された問題Ⅳとほぼ同じであった。	標準

※難易度は5段階「難・やや難・標準・やや易・易」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

<学習対策>

- 出題分野は、大問では欧米地域・アジア地域が出題され、双方にまたがる東西交流なども扱われている。出題頻度が高い中国史・ヨーロッパ史・インド史・東南アジア史、アメリカ合衆国史・東西交流史などのテーマはとくに丁寧に学習しておきたい。また、戦後史もよく出題されるので、教科書の内容を最後まで学習することが重要である。
- 難易度としては、一部に難しい設問が出題されることがあるが、全体には、基本的事項を総合的に捉える力が試されているので、平易な設問を絶対に落とさない確実な学習が必要である。
- 問題Ⅳの長文論述問題は、歴史的事象の背景・構造やその因果関係などを問うテーマが多く、普段から世界史を大きな視点からとらえる学習をしていく姿勢が大切である。
- 過去問をよく研究し、頻出するテーマの設問には短文論述で答えられる程度の学力を身につけたい。